

津波被災者のアール・ブリュットと行政 —さをり織りと心のケア—

Tsunami Survivors' Art Brut and Government —Mental Healing through Saori-Weaving—

イザンベール真美*
ISAMBERT Mami

要 旨

「さをり織り」は大阪で生まれ、枠にとらわれずに誰しもが自由に織ることのできる芸術活動として知られている。本稿では東日本大震災において三陸で津波を被災した人びとが実践している「さをり織り」を事例として、その心のケア効果を検証し、過去の行政との関わりと今後の状況を検討し、最後に、「さをり織り」を含むアール・ブリュット（生の芸術）が、マイノリティがマジョリティと共に、主体的に社会に新しい価値を生み出す手段となり得るかを問う。本研究で行なった調査では、さをり織りはトラウマ性の症状の80-100%を緩和する効果を持つが、それは楽しく集中しつつ瞑想と同じ効果があると仏教僧が評価した、タイの2004年大津波の事例を一定程度、裏付けるものである。また、先生と生徒という上下の関係を作らず、教室に来ていた知的障害者を「常に上に見る」といった「さをり織り」のスタンスは、被災者をも一方的な「支援してもら側」に置かず、新たな価値を我々にもたらす、主体的な復興の担い手として位置付けるのではないかという、筆者の考察も最後に加える。

Abstract

"Saori weaving" originated in Osaka and is known as an artistic activity in which anyone can weave freely without being restricted by any rule. In this paper, we will examine the psychological care effect of "saori weaving" practiced by people affected by the tsunami in Sanriku region during the Great East Japan Earthquake, and examine the past relationship with the government and the future situation. Finally, we ask whether Art Brut (raw art), including "saori," can be a means for minorities to proactively create new values in society, together with the majority. The research conducted in this study shows that "saori weaving" is effective in alleviating 80-100% of traumatic symptoms, which to a certain extent supports the case of the 2004 tsunami in Thailand, where Buddhist monks evaluated it as having the same effect as meditation, while being enjoyable and focused. The "Saori" style of weaving, which does not create a hierarchical relationship between teacher and student, but always looks up to the mentally disabled who come to the class, may position the disaster victims not as one-sided "recipients" but as proactive reconstruction leaders who can bring new value to us.

キーワード：さをり織り アール・ブリュット 津波被災者 インクルージョン 共創

keywords: Saori Weaving, art brut, Tsunami survivors, Inclusion, Co-Creation

I 本稿の目的

アール・ブリュットは心と社会を癒すのか？

本研究は、大阪で生まれ、今では、自由に誰でも織ることのできるアートとして知られる「さをり織り」の心のケアとしての効果を検証することを目的とし、この芸術活動に行政がいかに関わってきたのかを考察したうえで、社会に対していかなる貢献をし得る資源であるかを

考察する。ここでとりあげる事例は2011年の東日本大震災における岩手県三陸沿岸の津波被災者による「さをり織り」の活動である。研究手法は当事者への聞き取り調査であるが、調査のアレンジメントについては、「さをりひろば」の理事などを歴任し、スマトラ沖地震以降、長年、「さをり織り」を支えてきた、社会教育士の東山高志氏に2011年以来、依頼しており、また、「さ

をり織り」の考案者である故城みさを氏のご子息で、「さをりひろば」の前代表の城英二氏および「三陸さをりプロジェクト」のコーディネーターの大森進氏にも多くのご協力をいただいている。

筆者はすでにタイの被災者による「さをり織り」の活動については、2012年に論文を発表し（イザンペール, 2012.）, 2013年5月24日には台湾の開南大学で行われた東北アジア文化学会で報告している（イザンペール, 2013.）。それらをふまえ、本年2022年の8月22日から25日にわたって宮城県と岩手県を東山高志氏と共同で聞き取り調査を行い、それについて香港におけるシンポジウム, International Festival for Arts, Inclusion and Diversityにおいて、東山氏と共同で報告している（Higashiyama and Isambert, 2022.）。本論文はこれら一連の研究活動をまとめ、あらたに、アール・ブリュット（生の芸術）の観点から、被災者の心の復興を考察するものである。

1. 「さをり織り」とは



城英二「さをりひろば」前代表の作品

著者は2022年10月23日に「さをり織り」の本部である、「さをりひろば」の前代表で、さをり織りの考案者、城みさを氏の子息にあたる、城英二氏に聞き取り調査を行った。本稿においてとくに断りが無い限り、著作の引用部分以外の城英二氏の発言はこの時の聞き取り調査によるものである。

さをり織りは、大阪在住の華道教師だった城みさを氏が「決まった型」を教えることを疑問視し、60年代に簡便な織り機を考案し、自由に織ることを通じて内なる自己の発見と表現による解放を目指す芸術活動である。きっかけは、城みさを氏が織った帯のたて糸が一本抜け

ていたことを「傷もの」と評されたときに、それをみさを氏が「傷ではなく模様」であり面白いとらえたことにある（城英二, 1995, p.13-14.）。さをり織りには「失敗」という概念がない。この点が重要であって、「さをり織り」は「教えないで引き出す」教育手法をとる。



大阪の手織適塾SAORIで「さをり織り」を行う筆者

「さをり織り」では、知力や体力と並ぶ、感性の力、すなわち、城みさを氏が「感力」とよぶものを引き出し、うちなる自己を世間の枠から解放してゆくことで、セラピー的な効果を持つと考えられる（城みさを, 2009.）。

はじめは一般の主婦たちの習い事であり、手本や見本どおりにするのをやめて自分の表現を行うことが目指されていたが、1970年に「さをり織り」と知的障害者との出会いがあった（城英二, 1995.）

城英二氏はまず、養護学校の教育手法に驚く。砂袋を一箇所から別の場所に移すだけといった単純作業によるリハビリテーションの教育を生徒に行っていたこの養護学校では、織り機を納入しようとする城氏に、切れない丈夫な糸でたて糸を通してほしいと教師が言ったという。「柄？色？そんな関係ありません。手足を動かす訓練やから、別になんでもよるしい。」と言われ、城氏は楽しく織ることができなければ意味がないと考え、世間の枠に人間を嵌めようとする「リハビリ」の概念そのものにも疑問を感じるようになる。

城みさを氏と英二氏らは、1981年の「国連障害者年」にあわせた「神戸ポートアイランド博覧会（ポートピア81）」で展示を行った後、養護学校教員や施設・作業所のスタッフを集めた講習会を開き、「教えないで自由に楽しくやらせる」教育メソッドを伝えた。講習会の参加者のなかで、「さをり織り」の精神に深く共感を

寄せたのが、高名な大規模施設、金剛コロニーの坂本由美子教諭であった。

金剛コロニーの生徒たちをはじめとする知的・発達障害者たちの作品のなかに城みさを氏と英二氏見出したことは、余計な知識や情報を持たない障害者のほうが、それらに「妨害」されずに、その人の魂に最も近い自己表現ができるという事実であったと言う。そこから新しい障害者アートの潮流を「さをり織り」が生み出すことになるのであるが、その点については本稿のIVの考察の節において、障害者や被災者といった社会的に弱い立場にいる人々の包摂、そして彼らとの共創(co-creation)社会に関連して論ずることにしよう。また、ここで強調しておくべきなのは、障害者が実践していることが有名ではあっても、「さをり織り」が障害者用に当初から設計されたものではなく、健常者も含めて誰もが自由に織ることのできる、万人に開かれたアートであるという点である。

2. アール・ブリュット (生の芸術)

「さをり織り」には「生(き)の芸術」と訳される、フランス語のアール・ブリュット(Art Brut)と共通点が多い。概念をはじめに提示したジャン・デュビュッフェ(Jean Dubuffet)によれば、アール・ブリュットは以下のように定義される(テヴオー, 2017, p.11-p.13)。

「自然発生的でかつ強靭に発明的な性格を持ったあらゆる種類、デッサン、絵画、刺繍、造型あるいは彫刻された像、等々、の作品。慣習的に芸術と呼ばれるものや紋切り型の文化の影響をほとんど受けていなくて、職業的芸術界とは無縁の無名の人々の手になる作品。模倣がほとんどと言っていいほどない。」

そして、アール・ブリュットには以下の三つの特徴があると言う。

- ① アール・ブリュットの作者は精神的にも社会的にもマージナルな人々である。
- ② 彼らの作品は通常「美術」に属すると思われるもの、つまり学校やギャラリーや美術館などのネットワークに入るものの外部で構想され、つくられる。
- ③ アール・ブリュットの作品は、芸術作品の慣習的な受け手に配慮することなしに—多くの場合、いかなる受け手をも想定することなしに—構想されたものである。

また、『アウトサイダー・アート』の著者、榎木野衣はアール・ブリュットよりもっとマージナルなものとアウトサイダー・アートを定義した上ではあるが、黒人奴隷が生み出したブルースやジャズを例に、つくり手自身の固有の衝動を唯一の起点とする芸術であり、病苦、孤

独、被災、困窮、追放、受刑、隔離といった人間の苦しみから生まれる芸術であるとしている。

「さをり織り」自体は、一定のカテゴリーや運動体に寄り添うものではないが、アール・ブリュット自体もそれは同じであり、慣習的に確立された正統の美術教育・工芸産業のネットワークの外部で構想され、専門的な美術・工芸教育を受けていない人が誰でも織ることができ、多くの場合、障害者や被災者といった弱い立場に置かれた人たちの解放と開花を結果としてもたらしたという点で、「さをり織り」はアール・ブリュットとしての本領を発揮していると言える。

日本でも、障害者の芸術活動をアール・ブリュットとして行政が支援した企画は少なくない。たとえば、2010年3月から9ヶ月間にわたって、フランスのパリ市立アル・サン・ピエール美術館において開催された「アール・ブリュット・ジャポネ」展は、滋賀県知事(当時) 嘉田由紀子氏を顧問とし、滋賀県社会福祉事業団が運営する「ボーダレス・アート・ミュージアム NO-MA」が企画した展覧会で、精神科病院や知的障害者施設等を利用する障害者の作品を集めたものである(アール・ブリュット・ジャポネ展カタログ編集委員会, 2011.)。目的は、作品に美術的な価値を認められることによる、芸術を通じた障害者のエンパワメントであり、「障害」という言葉が肯定的な意味で認知され、障害者が社会で自立した生活が出来る社会の実現を目指すことにあるとされている¹⁾。

成人・健常者・男性の「立派な美術」に収まらない作品をアール・ブリュットという概念を生み出したジャン・デュビュッフェの祖国、フランスにおいて日本の障害者が発表し認められたことの意義は大きい。他方、「障害者の文化芸術国際交流事業」や「障害者の文化芸術創造拠点形成プロジェクト」など、近年目立つようになった昨今の文化庁での動きに見られるように、アール・ブリュットを国家が進んで公認していこうとする時、そこからはどうしても「負のニュアンス」が抜け落ちてしまうと榎木野衣は指摘する。彼によれば、アール・ブリュットの持つ「生」「無垢」「純粹」といったイメージのほうが行政に都合がよいからであって、アール・ブリュットの担い手には障害者、老人、子どもだけでなく、犯罪者や死刑囚、カルト教祖などが当然にいるからであると言うのである。そして、アール・ブリュットが公的な支援の対象となるとき、「生」「無垢」「純粹」な創作に篤く、「悪」「外道」「異端」な創作に疎い事業となりはしないかと懸念している。前者は教育や福祉と容易に結びつくが、障害者福祉や児童学習、生涯学習といった国家にとって都合の良い文化支援に偏ってしまうとしたら、原アール・ブリュットの反面しか伝え

¹⁾ <http://www.art-brut.jp/about.html>

ていないことになってしまうというのが、美術評論家としての榎木の意見である。

本稿は、行政が「さをり織り」等のアール・ブリュットにより一層の支援をすべきだという立場をとっているため、公的支援がアール・ブリュットの原点を壊す可能性があることは常に留意しておく価値があると考えられる。実際、城英二氏らが気をつけていることは展示を「チャリティーにしない」という点である。「障害者が一生懸命創りました。よろしかったら買ってやってください。」というスタンスは、「さをり織り」作品を売る作業所のバザーでしばしば見られるのが現実ではあるが、それは善意による差別に近いのではないだろうか。さをりの本部とそれに近いところにいる人々は、ギャラリーや百貨店の催事場を正式に使い、数万円の値段をつけ、「これは芸術です。気に入ったなら作品を買ってください」という姿勢を崩さないようにしていると言う。なぜならば、前述のように、「さをり織り」をするにあたって、障害は才能でこそあれ、ネガティブな要素ではないからである。

また、この点については、障害者ではなく、三陸で津波被災者の活動のコーディネーターをつとめている大森進氏は、ボーダレス・アートとは言え、時間も労力も才能も要する作品は正当に評価され、公正な取引（フェア・トレード）で売買されるべきだと考えている。

それでは、タイで2004年に、そして、日本で2011年に津波を被災した人びとは、トラウマを創作の起点として「さをり織り」というアール・ブリュットをいかに実践し、いかに、自らの心を癒して解放されていったのだろうか。筆者がタイに2011年、三陸に12年と22年に訪問して行った聞き取り調査の結果を次節で論じよう。

II 聞き取り調査

津波被災者のアール・ブリュット

榎木野衣は前述の理由でアール・ブリュットではなくあえてアウトサイダー・アートと呼ぶものについてこう述べている（榎木, 2015.）。

物で満ち足りたなかで文化は余剰のように考えられがちだが、過酷きわまりない毎日を日常として生きざるを得ない者ほど、実は文化を欲している。ひとはただ、のんびんだらりとだけ生きることはできない。追いつめられれば、追いつめられるほど、自分が単なる「もの」ではなく、実存する「ひと」であることを、表現を通じて主張する必要に駆られる（下線、筆者）。

本稿は津波被災によって心理的に追いつめられた人びとのトラウマを扱うものであるが、トラウマとは元来、ギリシャ語で身体の外傷を表す言葉であり、この言葉を形容詞抜きで「心の傷」という意味で用いたのは、米国の心理学者、ウィリアム・ジェームズ(William James)

だと言われている。現代を代表する精神医学者である、ヴァン・デア・コーク(Bessel A. van der Kolk)らによれば、トラウマとなる経験をすることは、ある意味で「人であること」の本質と言える。それがPTSDと呼ばれる精神障害のレベルに達すると、以下のような症状に見舞われる。

- ① トラウマティックな出来事の反復的で侵入的で苦痛な想起。
- ② 出来事についての反復的で苦痛な夢
- ③ 外傷的な出来事のフラッシュバック
- ④ 外傷的な出来事を象徴・類似するきっかけに晒された時の心理学的・生理学的苦痛
- ⑤ 外傷的出来事への想起不能。
- ⑥ 重要な活動への関心または参加の著しい減退。
- ⑦ ほかの人から孤立、疎遠になっている感覚
- ⑧ 感情の範囲の縮小
- ⑨ 未来への期待の減退
- ⑩ 睡眠障害
- ⑪ 易刺激性、怒りの爆発、集中困難、過度の警戒心、過度の驚愕反応など（イザンベール, 2012.）。

以上のような反応あるいは症状は、トラウマから自分を解放できなかった時に生じるものと思われ、榎木が述べたように、「過酷きわまりない毎日を日常として生きざるを得ない者」が「追いつめられれば追いつめられるほど、自分が単なる『もの』ではなく、実存する『ひと』であることを、表現を通じて主張する必要に駆られ」、実際に表現した場合、トラウマから免れ得る可能性がある。筆者は震災から1年を経た2012年4月に岩手県三陸沿岸の仮設住宅で「さをり織り」を行っている被災者を訪ね、「さをり織り」とトラウマティック・ストレスの関係を調査した。

1. 仮設住宅におけるさをり織り実践者の調査

岩手県三陸地方における被災者の「さをり織り」は、東山高志氏が震災のあった2011年9月末に織り機や糸など、一式を山田町と宮古市に導入したことに始まる。当初は避難所で「さをり体験」会を開催し、後に、引きこもりやニートの若者のための施設、「宮古若者サポートステーション」が作業場を提供し、ここに通所する若者が仮設住宅に広めた。地域の人の主体性を重んじるため、岩手県の被災者のさをり織りは「三陸さをりプロジェクト」と名付けられ、宮古市在住の大森進氏がコーディネーターを勤めることになった。また、プロジェクトの立ち上げ資金は、2004年のスマトラ島沖地震によるインド洋大津波を被災し、トラウマからの解放と地域復興のためにさをり織りを実践していた、タイの被災者たちが、「PRAY FOR JAPAN（日本のための祈り）」のタ

グが入ったリストバンドの売り上げから賄っている。このタイのプロジェクトは東山氏が中心人物の一人であるが、そのメンタル・ヒーリングの効果については後述する。

2012年4月21日から25日に、筆者は大森氏の紹介によって宮古市と山田町の仮設住宅でさをりを行う女性20名に7つの症状・状態について、「さをり織り」を始める以前とその半年後以降、すなわち2012年4月次点でのメンタルヘルスの回復率を聞いた。その結果が表-1である。

以下の表-1の20名の調査対象のうち、親族や大切な人を失った人は7名(35%)、自分の命の危険に晒された人は13名(65%)である。また、全員が家を流されており、子どもの成長を記録した写真など、思いのこもったものを失ったダメージは非常に大きなトラウマになり得るとされている。

言うまでもなく、20名というサンプル数は到底、統計的に有意なデータとはなり得ないが、もともと「さをり織り」を行っている人の人数が多いためやむを得ず、また、少ないサンプル数であっても、症状が完全になくなりはしなくとも軽減したと言う人まで含めれば、80%から100%の回復率があったことから、メンタルヘルス面での「さをり織り」の効果は特筆すべきものがあると言えよう。なぜメンタルヘルスのヒーリング効果があるのかについては、III節で考察することにする。

表-1さをり織り開始前後のメンタルヘルス調査

2012年4月実施

症状・状態	さをり開始以前 2011年10月 以前 罹患率	開始半年後 2012年4月時点 回復・軽減 回復率
フラッシュ バック	12人 60%	2人・8人 軽減者を入れた 回復率 83%
悪夢	6人 30%	3人・3人 回復率 100%
不眠	15人 70%	5人・9人 回復率 93%
被災想起の回避	7人 35%	2人・5人 回復率 100%
驚愕反応	13人 65%	2人・11人 回復率 100%
うつ状態	15名 75%	3人・12人 回復率 100%
精神科受診者	4名 20%	4名 不変

2012年4月の調査で出会った方々の多くが語ったことは、仮設住宅の建築の問題から来る暮らしにくさだっ

た。夫婦で四畳半二間のスペースで暮らしているが、荷物を置けば実質、三畳で寝て食事をすることになる。畳以外の部分はフローリングで冷たく、居られない。また、一年中、結露が畳や壁を覆い、湿気に悩まされることは全ての人が訴えていた。

災害救助法によれば、「応急仮設住宅」は1戸あたり平均29.7㎡(9坪)を標準とし、2,401,000円以内で建設することと定められている。そして、供与期間が2年以内とされているにもかかわらず、あくまでも応急の環境で10年以上居住することになった人もいたのである。また、「さをり織り」は仮設住宅の集会所を使って実践された。災害救助法では、50戸以上設置された仮設住宅では集会所を設けることが可能であるとされているが、もちろん、「さをり織り」だけに使うことができないため、織り機や糸の置き場には工夫が必要だった。

2. 11年後の元被災者の聞き取り調査

筆者は東山高志氏とともに、被災11年目にあたる2022年8月22日から25日まで、被災地を訪ね、2012年に聞き取り調査を行った人びとを再訪した。20人全てが仮設住宅を離れて多くは災害公営住宅に移り住んでいた。仮設住宅の時期には毎日のように実践されていた「三陸さをりプロジェクト」も、現在は、岩泉、コーディネーターの大森進氏の宮古の事務所、自立サポートセンター、田老、大槌、釜石など、15のグループで週に数回行われるにとどまっている。調査を行った2022年はいまだ新型コロナウイルス感染症のリスクを踏まえ、活動を休止している団体がかかり見られた。そこでさをりを続けているリーダー格の人びとに話を聞いた。

「三陸さをりプロジェクト」のコーディネーター、大森進氏は、防潮堤に囲まれた故郷を、安全なのは良いがどこか檻の中で暮らしているようだと感じている。彼によれば、家が流された人、流されなかった人、中途半端に浸水した人、命の危機に晒された人、目の前で犠牲になった人を見た残酷な経験をした人、何も被害はなかったがライフラインが止まる経験をした人と、いろいろな体験をした人が地域にいたが、先生と弟子の関係を作らせず、「誰でもどうぞ」と開かれた「さをり織り」の精神のおかげで、被災者は皆、平等だという意識から多様な人びとがつながることができた点を評価している。彼らが「さをり織り」を行った原点は癒しであり、織っている間は津波のことも流されたことも忘れていられた。癒しによって新しい心を持ち、新たな心傷を負った他者へのまなざしを持つこともできるようになったと言う。台湾から義援金を受け取り、2016年の台湾南部地震ではお返しに支援をした。津波も戦争も同じと考え、現在はウクライナでの戦争を憂慮して、岩手県洋野町に住む、サハリンでウクライナ人と結婚した日本人に思いを

馳せ、被災者間の国際関係が生まれつつあることを感じている。

「さをり織り」を続けている人のなかには、山田町のAさんのように、地域の観光振興に貢献している人もいる。Aさんは漁協の女性部の責任者として、ひとつのことで皆がひとつになって共有できれば良いと考え、新しい楽しみと情報共有の場として「さをり織り」を導入した。その後、地域の人びとと共有してという方向性からは離れ、自宅で観光客に「さをり織り」を教え、自作の作品を道の駅で販売している。また、グリーンツーリズムの一環として自宅を解放して織りカフェとし、牡蠣やそば打ちの体験を提供する彼女の活動は山田町観光協会の体験プログラムとなっている²⁾。

同じく山田町のKさんは被災者間国際協力に非常に熱心である。8年間、豊間根仮設住宅で暮らし、自治会長をつとめていた。彼女が「さをり織り」を始めたのは、仮設住宅が出来て一年後の2012年に山田町の木村洋子議員に勧められたことがきっかけだった。「さをり織り」以外に手製の布草履など多彩な作品を創るKさんもまた、心に傷を負う他者への思いが深く、現在は3.11を忘れないために布草履を311足作り、販売して利益をウクライナに送ることを構想している。

また、「さをり織り」が地域の世代間交流に役立ったことも付記しておきたい。震災当時大学生だったNさん



「三陸さをりプロジェクト」のマスコット、「まいっかちゃん」



「さをり織り」の打掛け

は、被災地支援に入っていたカリタス大槌の職員になり、自身も「さをり織り」を実践し、2016年にショッピングセンター、マストで行われたファッションショーに出演した。彼女によれば、祖母と孫の関係のような、親よりも十歳も二十歳も年上の人びとと交流できたことがさをりの良さで、地域で「お茶っこ」と呼ばれる、漬物とお茶を囲むおしゃべりの会を大切にしていた。結婚が決まり、衣装を創ってくれるように頼むと「おばあちゃんたち」は喜んで「さをり織り」の打ち掛けを創ってくれたと言う。

この打ち掛けや「さをり織り」のマスコットで、被災して心が折れることがあっても「まあ、いいか」の精神でいきたいという願いがこめられた「まいっかちゃん」は、本年2022年に香港で開催されたInternational Festival for Arts, Inclusion and Diversityでも展示されている。

Ⅲ 調査結果：心のケアとしてのさをり織り

Ⅱ節で見たように、「さをり織り」には一定のメンタル・ヒーリングの効果が見てとれる。その理由はどこにあるのだろうか。2011年にタイで行った調査の結果と合わせて考察してみよう。

1. タイにおける津波被災者の経験

²⁾ <https://www.yamada-kankou.jp/wonderful-taiken/>

タイにおける被災者の「さをり織り」は、2004年にスマトラ島沖大地震が起きたインド洋大津波によってタイにおける死者9,800人中、5,800人強の犠牲を出したパンガー県を中心に実践された。2007年には日本の外務省のODA、「草の根・人間の安全保障無償資金協力」を受け、「さをり織り研修センター」がバンムアンに設置され、現在では、東山高志氏が代表をつとめる日本のフェアトレード、ツナミクラフトが輸入するほど、商品価値が向上し、元被災者の女性たちの収入源となり、女性のエンパワメントにも役立っている。

2004年12月26日の津波被災から1ヶ月あまりの2月3日という迅速さでバンムアンに「さをり織り」を導入したのは、タイの森林派仏教僧、アーチャン・光男・ガヴェサコー師である。師は心の健康のために、呼吸に集中する「アーナーパーナ・サティ」という瞑想法を推奨しているが、集中して瞑想することは修行を重ねないと困難である。しかし、津波トラウマに襲われた人は、何かに集中して心を落ち着かせ、雑念、すなわち、津波のトラウマ的記憶から離れる必要がある。そこでアーチャン師は、楽しく織物に集中できる「さをり織り」を勧めたのである（イザンベール, 2012, p.220-221.）。

これは、仏教における「感情への執着からの解放」という考えに基づくと考えられる。あまりにも大きな恐怖、喪失や悲嘆である津波被災体験であっても、仏教の教えでは、喜び、楽しさ、悲しみ、恐怖、苦悩といった感情は、環境や条件によって様々に形を変える、本体の無い「無常」、「無我」のものである。人間がその無常・無我なる感情に執着することこそが、苦しみであるとアーチャン師は説いている（アーチャン光男・カウェーサコー, 2010, p.5-p.6.）

アール・ブリュットの一つの捉え方として、前述した榎木野衣は、それをアウトサイダーアートと呼びつつ、つくり手自身の固有の衝動を唯一の起点とする芸術であり、病苦、孤独、被災、困窮、追放、受刑、隔離といった人間の苦しみから生まれるとした。タイ仏教の解釈を加えれば、人間が被災という苦しみから「楽しく」逃れるための道が「さをり織り」であり、結果として優れた芸術を生み出すということになる。

「楽しく」という点は、「さをりひろば」の前代表の城英二氏も強調している。2022年10月23日に行ったインタビューにおいても、さをり織りにヒーリング効果があることについて意見を聞くと、医者に干渉されないからではないかという考えを示した。精神科は世間の型にはめて患者を元の状態に戻そうとするが、「さをり織り」は手本を作らず、先生と生徒という関係を作らずに、お互いに作品を褒めあってどう成長するかを後述する「グループのみんなで学ぼう」という原則に定めてある。精神医学的な意味でのエビデンスをとることは困難

ではあるが、実際に、タイ南部被災地で「さをり織り」を実践した100人近くの人びとは当初、突然倒れるなどの発作があった人も含め、筆者が調査をした2011年時点でトラウマ性の症状に悩まされる人は一人もおらず（イザンベール, 2012.）, また、岩手県の被災者で調査に応じた「さをり織り」の織り手については、典型的な症状の80%から100%は改善していることは前述のとおりである。

2. 日本におけるさをり織りのヒーリング効果

II-2で記述したように、岩手県の被災者たちが11年目を迎えて振り返った時、「さをり織り」にメンタル・ヒーリングの効果がなかったと考える人はおらず、織ること自体で苦悩を忘れられ、失敗がないアートのなかで、先生と生徒の関係がない、たいらな環境で人間同士のつながりができ、安心することができたという点が共通する感想である。この点は、「さをり織り」の指導方針である、四つのスローガンが活かされたものだと考えられる（城英二, 1995, p.18-p.21.）。

① 機械と人間の違いを考えよう

機械の真似をしたような完璧なものを作る必要はない。むしろ、不完全なものの中にこそおもしろいものがあるのではないか。すると、「人間らしい」というのは「いっぱい失敗をする」ということであるが、いっぱい失敗したものを作ればいいのではないか。

② 思い切って冒険しよう

常識を突き破ることによって新しいものが生まれてくる。常識という「とらわれ」からどうやってはずれていくか。そういう「くびき」をどうやってはずすかがテーマ。

③ キラキラ輝く目を持つ

常に、新しいもの、美しいもの、優しいものなど、その人の目の向いたものに、キラキラと輝かせてやりましょうというものの見方。

④ グループのみんなで学ぼう

いわゆる弟子を1万人も持つ城みさを氏という考案者が存在しても、先生と生徒、「教える側」と「教えられる側」という関係を作らない。

最後の④について、「さをり織り」を実践した障害者とその保護者の関係の変化は被災者と社会との関係に比較して考えてみても興味深いので検討してみる。

障害者が「さをり織り」の教室に来る時には多くの場合、母親が同伴する。「さをりひろば」では、保護者も障害者とともに織ることを勧められる。教師や親で「さをり織り」ができない人はたくさんいる。なぜなら、人に教えてもらわずに自分の意志でやることができない人が社会には多いからである。それに対して、たいいてい

の場合、知的・発達障害者のほうが自分の意志で保護者よりもうまく織ることができる。教わることの多いのは保護者のほうであるという逆転した状態になり、真の意味で障害者を「下に見ない」ことを保護者や「さをり織り」にかかわる人びとが習得できるようになる効果があるのである。

被災者も同様で、「下に見られている」という表現には語弊があるが、「援助する側」と「援助してもらおう側」という上下の関係性でみられがちである。インド洋大津波時のタイでは「第二の津波」と言われたほど殺到する援助に、政府や国連が調整に苦労し、日本でもまた、多くの人が支援にかけつけたことには感謝しているが、若い大学生がまったく経験がないのに草むしりをさせてくださいと訪ねてきたり、話し相手や肩揉みをしたという人の相手には少し苦労したという逸話を聞いた。被災していない外部の我々は善意であっても、被災者のことを一方的に「支援を受ける」「受け身の存在」ととらえがちである。これに対して、「さをり織り」は被災者自身が自主的に行うアートであり、そこには「支援してもらおう側」という立場はなく、プライドを持って芸術活動が続けることができるのである。

IV 考察：「さをり織り」と行政・共創社会

本稿の最後の節では、アール・ブリュットである「さをり織り」がその自由なあり様によって、日本の縦割り行政と関係を維持することが難しいことを指摘し、障害者や被災者といった社会的弱者が社会に包摂され、かつ、能動的に社会を作る担い手となるヒントを「さをり織り」が持っているのではないかという、筆者の考えを提示しようと試みる。

1. 「さをり織り」と行政の微妙な関係

日本において「さをり織り」が行政と最も深い関係を持ったのは、1981年の国際障害者年から1990年代にかけて、障害者アートの枠組みのなかでのことである。筆者はこの時期の「さをり織り」についても、2022年10月23日に行った城英二氏へのインタビューで詳細と意見を聞いている。後の宮城県知事で当時の厚生労働省障害福祉課長だった浅野史郎氏と「さをり織り」の考え方が一致し、様々な企画を経るなかで当時の橋本龍太郎首相からも注目されるようになり、1,000を越える養護学校および特別支援学級に織り機が置かれた。浅野史郎氏の紹介によってケネディ大統領の妹であるジーン・ケネディ・スミス (Jean A. Kennedy Smith) と城みさを氏と英二氏らが出会い、1989年には、彼女がジョン・F・ケネディ・センターで障害を持つ青少年に芸術と教育のプログラムを提供するために主催する、「ベリー・スペ

シャル・アーツ (Very Special Arts)」の第一回大会に参加することになった (さをりひろば, 1990.)。

この時に城みさを氏がワシントンで行ったスピーチがおおいに共感を集めた。「さをり織り」の「教えないで引き出す」教育法を城みさを氏は「ノン・クオリティ・コントロール」つまり、「品質管理は不要であります。ノーは一切言わないこと。ただほめるだけ。彼や彼女らを自分より上だと常に思うこと」と述べ、喝采と注目を浴びたのである (城みさを, 2009, p.121-p.127.)。

「ノン・クオリティ・コントロール」とはすなわち、障害者を健常者、引いて言えば社会の統制 (コントロール) 下に置く存在とはみなさないという考え方である。障害者のみならず、被災者もまた、「助けられる側」という一定のイメージを社会に押し付けられ、その型にはめられるという意味で、コントロール下にある存在とみなされる。そのくびきから解放するために、さをり織りの「ノン・クオリティ・コントロール」精神が活かされたと考えることができる。

ところが皮肉なことに、行政には「ノン・クオリティ・コントロール」のモットーに立った障害者あるいは被災者向けの政策を実行することは困難である。被災地で我が国政府がとった「こころのケア」政策は精神科医を県の精神保健福祉センターや精神科医療機関、避難所などに送る支援の一定の充実ぶりは認めることができるが³⁾、岩手県が作成した文化・芸能・スポーツ分野における被災地訪問者リストを見る限り、膨大なリストのなかでスポーツ分野は子供たちにサッカーや柔道を教えるものやマラソン大会といった被災者参加型のものが見られるものの、文化・芸能分野では殆ど全てが被災者が観客という受け身のイベントばかりが並んでいる⁴⁾。美術分野について詳細を調べてみると、「東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業 (Art Support Tohoku-Tokyo: ASTT)」が各地でワークショップを開催し被災者自身の芸術活動を振興している点が注目に値する (熊倉, 2013, 9章)。それでも日本政府自体は被災者が主体的に芸術活動を営む運動への支援に積極的とは到底言えない状況である。

「さをり織り」はVery Special Artsを「とっておきの芸術祭」と日本語に意識して開催し、1992年の天保山ハーバービレッジおよび海遊館での展示とイベントには、28,000人の参観者を集め、海外14カ国を含む1,500人が出品者または出演者として参加した。「とっておきの芸術祭」実行委員会の特別顧問は大阪府知事と大阪市長が就任し、委員には厚生省や大阪府および大阪市の障害福祉政策分野の高官が名を連ね、後援は総理府障害者対策推進本部、厚生省、文部省、大阪府、大阪市、兵庫県、神戸市、全国社会福祉協議会などの行政機

³⁾ https://saigai-kokoro.ncnp.go.jp/document/medical_personnel04.html

⁴⁾ http://www.2.pref.iwate.jp/~hp0212/fukkou_net/raiken.html

関および関連機関が行なっている（とっておきの芸術祭, 1992.）。この企画には厚労省から7,000万円の助成金が組まれたという。現在では大阪のさをり本部による「とっておきの芸術祭」は続けられておらず、京都、高松、そして浅野史郎氏が知事であった宮城県で継続されている。

「さをり織り」の大阪の本部が「とっておきの芸術祭」を継続していないのは、行政官との関係性の維持が困難だったからだと言われている。城英二氏は語ったが、「ノン・クオリティ・コントロール」に代表される「さをり織り」の哲学を理解する官僚または政治家が持続的に障害者福祉政策のリーダーシップを把握しているわけではない現実を示していると思われる。また、「さをり織り」は「誰でも」織れるアート活動ゆえに、文化政策なのか、障害者福祉政策なのか、被災者のこころの復興政策なのか、女性のエンパワメントなのか、省庁の縦割り行政のなかで管轄が見えにくいことも挙げておくべき点だと思われる。

ただし、「さをり織り」に行政がかかわることが良い効果をもたらすかどうかは慎重に考えるべき問題ではある。さをりは万人に開かれているものとは言え、今までは障害者や被災者といった社会的にマージナルな、あるいは、弱い立場にいる人びとの芸術として目覚ましい開花ぶりを見せた点で、「生の芸術」すなわちアール・ブリュットの本質を象徴している。しかし、「ノン・クオリティ・コントロール」という点では文化芸術政策の趣旨には必ずしも沿わず、他方で、障害者福祉や被災地復興のための「作業療法」という枠組みをはめられることも到底、自由な「さをり織り」の哲学に合わないものである。障害者の解放、そして、被災者の心のケアでは確実に成果のあった「さをり織り」が営利目的を目的とする活動ではない以上、今後も公的支援が必要だと考えられるが、どの政策分野の枠にもはまらない「さをり織り」のありのままの姿を理解するスタンスが行政に求められるであろう。

2. アール・ブリュットと共創社会

「さをり織り」は万人に開かれ、とりわけ障害者や被災者に実践されたことで、社会的包摂（social inclusion）の実践としばしば言われる。例えば、世界中の「さをり織り」実践者が多く参加した本年2022年9月のフェスティバルも、「アートとインクルージョンと多様性の祭典」と名付けられ、障害者、被災者、そして性的マイノリティなどのインクルージョンが論じられた⁵⁾。知的障害者の織るものの方が、健常者よりも容易にその人の魂に近い自己表現が可能であることを城みさを氏自身が発見し、常識の枠にとらわれない万人の魂の

解放を謳った「さをり織り」の歴史から見て、そこにはインクルージョンをさらに超えて、マイノリティこそマジョリティと共に社会に新しい価値を創る、「共創(co-creation)」の萌芽が見られると筆者には思える。

「共創」の概念はC.K.プラハラードとV.ラマスワミが消費者参加について提唱した、もとはマーケティングの用語であるが（Pralhad and Ramaswamy, 2004.）、現在はより広い意味で用いられ、立場を超えた多様な人びとや組織が共に新しい変化を創ることという概念でとらえることが可能である（小泉・河村, 2016.）。

津波の被災者を本稿は「社会的弱者」あるいは「社会的に弱い立場に置かれた人びと」と何度か表現してきたが、それは彼、彼女らが一方的に政治的・社会的な保護の対象だということの意味しない。「さをり織り」に限らず、被災者たちが自らの復興の過程で主体的に行なって来た活動が、日本社会に変化をもたらし、より良いあらたな価値を生み出す可能性は、被災しなかった我々が、城みさを氏の言葉を借りれば、彼・彼女らを「上に見る」スタンスを持てば、おおいにあるだろう。そのような気付きを1970年代に早くも社会に発信してきた「さをり織り」は現代社会において今後も、注目に値するアール・ブリュットであり続けると言えよう。

引用文献

- アーチャン光男・カウエーサコー, 2010. 『心の健康のための7つのトレーニング』 マーヤーゴータミー財団。
- アール・ブリュット・ジャポネ展カタログ編集委員会, 2011. 『アール・ブリュット・ジャポネ』 現代企画室。
- イザンベール真美, 2011. 「ヴェトナム帰還兵のPTSD（心的外傷後ストレス障害）の形成：トラウマと兵役をめぐる言説」九州国際大学法学会『法学論集』第17巻第3号。
- イザンベール真美, 2012. 「災害・紛争等緊急時メンタルヘルス分野における有効な国際的人道支援の進展：スマトラ島沖大地震・インド洋津波によるタイの被災とケアの事例」九州国際大学法学会『法学論集』第18巻第3号。
- イザンベール真美, 2013. 「タイと日本の津波被災地における『さをり織り』プロジェクト：アジアの海を往来するメンタル・ヒーリングとしての芸術活動」台湾、開南大学、東北アジア文化学会国際学術大会報告。
- 小泉康一・河村千鶴子編著, 2016. 『多文化「共創」社会入門：移民・難民とともに暮らし、互いに学ぶ社会へ』 慶應義塾大学出版会。
- 熊倉純子（監修）, 2013. 『アート・プロジェクト：芸術と共創する社会』 水曜社。

⁵⁾ <http://ifaid.artforalljapan.org/>

C,K, Prahalad and Venkat Ramaswamy, 2004. The Future of Competition: Co-Creating Unique Value with Customers, Harvard Business School Press.

さをりひろば,1990.『Very Special Arts Japan 第一回 国際障害者のための手織教育研究会記録 1990.4.10～14.』

榎木野衣,2015.『アウトサイダー・アート入門』幻冬舎。

城英二,1995.『とっておきの「さをり」：教えないで出さず手織り』ぶどう社。

城みさを,2009.『感力へのめざめ：答は自分もっている』現代手織研究所。

ミシェル・テヴォー,2017.『アール・ブリュット：野生芸術の真髄』（杉村昌昭訳），人文書院。

とっておきの芸術祭実行委員会 et.al., 1992.『「とっておきの芸術祭」開催報告』。

Takashi Higashiyama and Mami Isambert,2022."The Saori-Weaving' Project in Post-Tsunami Disaster Areas in Thailand and in Japan: An Art Activity that Bridges over the Asian Seas as a Therapy", Presentation at the International Festival for Arts, Inclusion and Diversity, Hong Kong.